

新刊新書 サミング・アップ

4冊で
4冊!

政府は膨大な財政赤字を抱え、公共事業悪玉論が叫ばれる中、本書はあえてその必要性を論じている。著者は土木計画学の専門家であり、道路やダム、港などのインフラや社会資本についての政策論の研究をしている。

たとえば、不要論の筆頭に挙げられる八ツ場ダムの建設に関しては、利根川の利水や治水に関して、さまざまな技術的データと環境要因などを丹念に説明しながら、その必要性を訴える。

甘い汁を吸っている業者や政治家が利権を守るためにやっているといった言説に惑わされることなく、要不要をきつちりと議論したうえで、必要なものに関しては計画的に遂行していくことが日本にとって大事だと説く。

公共事業が 日本を救う

藤井聡著



文春新書
872円

イギリス近代史講義

川北稔著



講談社現代新書
798円

「経済成長」という概念は、ヨーロッパを中核として成立する近代世界システムの基本イデオロギーであり、真つ先に産業革命を成し遂げたイギリスは、その象徴的存在ともいえる。そんなイギリスは、日本にとって近代化と資本主義発展のモデルだった。しかし、その栄光も今は昔。

そのイギリスがいかにして世界を支配する大英帝国となつたか、そして20世紀以降の衰退の原因を、西洋史の専門家として概観する。経済問題だけでなく、人々の生活全般までを含めた社会史となつているのも特徴だ。

「失われた20年」が指摘される日本は、イギリスと同じ轍を踏もうとしているのか。同国の近代史をひもとくときながら日本の未来をも見据える。

この6月、ユニクロを展開するファーストリテイリング、インターネット通販大手の楽天と、大手企業が相次いで自社内における「英語公用語」化を発表し話題を集めた。賛否両論あるものの、とりあえず英語をというビジネスパーソンは増えて、英会話スクールは活況を呈している。

英語同時通訳者の先駆けであり、現在は大学で異文化コミュニケーションを教える著者はこうした現状を「英語パニック」とし、英語の社内公用語化にはたして実効はあるのかと問いかける。英語支配の弊害、英語教育の問題点などを指摘しながら、仕事で使える英語をいかに学ぶか、グローバル化に本当に必要なものは何かと、日本人にとっての英語をあらためて考える。

「英語公用語」は 何が問題か

鳥飼玖美子著



角川oneテーマ21
760円

食卓は学校である

玉村豊男著



集英社新書
756円

イタリア人は「人生に必要なことは、みんな食卓から学んできた」と言い、フランス人は「世界でいちばん食卓についている時間が長い」と自慢する。ひるがえって、現代日本人の食事にかける時間は、何とも短いようだ。

各国の食の社会的、文化的な背景には興味が尽きない。バイキング料理はスウェーデンのスムーガスボードが発祥で、単なる食べ放題とは似て非なるもの、日本の温泉宿で当たり前のように刺し身の出されるわけ、社会が近代化すると「温かい・柔らかい・甘い物」が好まれる理由など、話題は縦横無尽にして彫りが深い。

食をライフワークとする著者が、会話を楽しむ食卓の大切さを語りかける。